「父と私」

第 12 組　音通寺　鈴木智顕

私は二年前の一月に父を亡くしました。心筋梗塞による突然の死であったため、まさに寝耳に水。右も左も分からないまま住職となりました。父もまだ７０歳の誕生日を迎えたばかりで、友人とゴルフを楽しんだわずか２週間後にこの世を去ることになるとは思いもしなかったことでしょう。そんな父は私が聞けばお寺の法務や仏法について教えてくれましたが、基本的に「私の背中を見て学べ」というスタンスでした。私自身も少しずつ教えてもらえばよいと胡坐をかいていた部分もあったため、住職になりたての頃はかなり不安でした。法名はどう付ければ良いのか、書き方は？同朋会は何をしたら良い？葬儀は？そのような様々な不安といざ向き合ってみると、不思議と父の姿、そして言葉が思い出されるのです。

時には「法名軸を書くときは字のバランスに気をつけなさい」という言葉となって、また、冬の朝布団からなかなか出られない時には、お朝事で父が鳴らしていた琴の音が背中を押してくれたり、通夜の法話はこんな感じで話をしていたなと真似をしてみたり、若輩者の私の講義に耳を傾けてくださる温かい同朋会があったりと、亡き後も支えてくれていることが良くわかりました。

人は死んだらそれでおしまい。ではないのです。父の生前の行いや言葉は、亡くなった後、より一層鮮明に浮かび、私に影響を与え、様々な学びを与えてくれています。正信偈には「遊煩悩林現神通　入生死園示応化」とあります。亡き人はお浄土へ行き、そこにとどまるのでは無く、私たちが南無阿弥陀仏に出逢うため

のはたらきかけとなって今一度この俗世に還ってくると言う意味です。父の死がなければ何を言っているのだろうと思っていたことが、今では確かにそうだと思わせてくれるのです。ふとした拍子に自然と手が合わさりお念仏を唱えるとき、まぎれもなく父は還ってきて「念仏申せ」と語りかけてくれています。